影が変わるとき

和田　雄貴

○登場人物

〈高橋家〉

高橋まもる（２２・２７）さとるの弟。無防備な正直さ。

高橋さとる（２２）まもるの兄。全国模試一位。

高橋ひろし（４５・５０）まもるとさとるの父。七年間、二つの顔で生きてきた。

〈警察〉

樋口　誠（２８）捜査一課。熱量が先走る。

石動　冴（３４）組対部。合理的思考を持つ女性。

〈組織〉

鈴木 正治（５５）スナック・ハピネス代表。

中川　浩（４３）組織の実働部隊長。鈴木の陰で動く。

木村 賢二（２０・２５）闇バイト実行犯。使い捨てにされた若者。

○墓地　朝

霧。誰もいない。

高橋ひろし（５０）が一基の墓の前に立っている。

スーツ。シャツがよれている。

ひろしは二つのみかんを持っている。

一つを供える。

もう一つを持ったまま、動けない。

墓石に刻まれた名前「高橋さとる」

【物語は五年前に遡る】

○スナック・ハピネス本社地下室　深夜

無機質な部屋。空調の冷却音。複数のモニターが並んでいる。

画面には「顧客データ　第四期」と表示されている。

名前の列。年齢の列。推定資産額の列。

七十代、八十代の名前がびっしりと並ぶ。

「処理済み」の赤文字が、行を追うごとに増えていく。

中川浩（４３）が部下に話している。

中川「（モニターに向かいながら）替え玉ってのはな。本物と区別がつかないから使えるんだ。区別がついた時点で替え玉の価値は消える」

部下は黙ってメモを取る。

中川、別のモニターを指差す。画面には闇バイトの募集文面。

「日払い五万　簡単作業　詳細はＤＭで」

部下「今月の応募者ですが、三十一名確認できています」

中川「素材の選別はしたか」

部下「はい。そのうちの一名、木村賢二（２０）という男。借金あり。実家に病気の母。本人は追い詰められています」

中川「最高の素材だな。早速使え」

部下、メモを取る。中川、最初のモニターに戻る。
「酒井康二」という名前が一行。その隣に小さな赤文字で「保留」
中川「この保留を処理済みに変えるのが今週の仕事だ」
部下が頷く。
処理済みとは、担当の老人が詐欺被害に遭ったことを意味する。
この７３歳の「酒井康二」はまだ生きている為、まだ狙われている。
中川、椅子を引いて座り、コーヒーを一口飲む。

○高橋家・台所　朝
高橋ひろし（４５）が弁当を詰めている。
三段の弁当箱に、きっちり仕切りを作る。
卵焼き。ほうれん草。梅干し。
毎朝同じ配置。
高橋まもる（２２）が眠そうに降りてくる。
寝ぐせが際立っている。
まもる「（フライパンの匂いをかいで）卵焼き？」
ひろし「今日は少し甘めだぞ」
まもる「やったー！」
まもる、冷蔵庫を開ける。牛乳を飲む。
ひろし、弁当の蓋を閉める。
まもる、コップを洗いながら。
まもる「さとるに起きてって言ってくる」
ひろし「今日は遅いって言ってたぞ」
まもる「あ、そっか」
ひろし、弁当袋に詰める。
「まもる」「さとる」と書いてある弁当を並べて置く。

○警視庁・捜査一課フロア　朝
樋口誠（２８）が机でファイルを開いている。

「闇バイト関連　未解決案件」と書いてある。
写真が三枚、ピンで留められている。
被害者の顔。住所。それぞれ違う場所。
でも、手口が似ている。
先輩の山口（４５）が通りかかる。
山口「また睨んでるのか、その顔写真」
樋口「三件とも同じ企業の元取引先です」
山口「どこだ？」
樋口「スナック・ハピネスです」
山口、少し止まる。
山口「そうか、しばらくマークして捜査を続けてくれ」
樋口「はい」

○スナック・ハピネス本社　昼
ひろし、デスクに座っている。
エクセルシート。店舗売上。
電話が鳴る。
ひろし「はい、高橋です」
電話の向こうから声。ひろし、受話器を持ち直す。
視線がドアの方に行く。
誰も来ないことを確認し
ひろし「（低く）わかりました。今週中に」
電話を切る。
エクセルに戻る。
数字を打ち込む。

○大学図書館　夜
高橋さとる（２２）がノートを広げている。
文字は少ない。でも意味がありそうな内容。

「ＴＨ」「ＳＫ」「中川」。「ＳＫ」から「中川」への矢印に「×」マーク。
さとる、ペンを止める。
窓の外の暗い空を見ながら何かを考える。
そしてまたノートに書く。

○高橋家・書斎　昼
ひろし不在。
まもるが書斎のドアを開ける。
プリンターを使うつもりだった。
PCの画面がついている。
まもる、プリンターのボタンを探していると、とあるタブが目に入る。
「顧客管理　β」というウィンドウ。
名前の列。住所の列。金額の列。
「処理済み」「保留」「処理済み」「処理済み」と並んでいる。
一番上の「処理済み」の行。
名前：田村祐介　６８歳
金額：－１，２００，０００
備考：「完了。本人確認不要」
まもる、動かない。
プリンターが紙を吐き出す音。
まもるは取りに行かない。
玄関のドアが開く音。
まもる、咄嗟に椅子を引いてPCから離れる。
でも画面を閉じる時間がなく、そのままの画面。
ひろしが書斎のドアを開ける。
まもると目が合う。
まもる「おかえり！プリンター借りてた」
ひろし「そうか」
ひろし、部屋に入りPCに近づく。

画面を確認する。
まもる「印刷終わったから」
まもる、出ようとする。
ひろし、振り返らずに
ひろし「まもる」
まもる「うん？」
ひろし「（PCに向かったまま）今週末、予定あるか」
まもる「ライブだよ」
ひろし「そうか」
まもる「うん。プリンターありがとう」
まもる、廊下に出る。
ドアが閉まる。
ひろし、PCに向かう。
ウィンドウを閉じる。
スマホを取り出す。
「中川」に電話しようとするが止まる。
スマホを置き、机の引き出しを開ける。
中に写真。
妻と二人の息子。まもる三歳。さとる三歳。
三人が同じ顔で笑っている。
ひろし、スマホを手に取り電話をかける。

○まもるの部屋　深夜
まもるがスマホを見ている。
検索履歴：「スナック・ハピネス　問題」
「個人情報　売買　罰則」
「処理済み　名簿　意味」
ドアをノックする音。
まもる「開いてる」

さとるが入る。
まもるのスマホの画面を見せる。
さとる「今日、書斎に入ったか」
まもる「プリンター使った」
さとる「それだけか」
まもる「パソコンの画面、スクロールした」
さとる「何日分くらい見た」
まもる「わからない。三十行くらい？」
さとる「お父さんに気づかれたと思うか」
まもる「……たぶん」
さとる、立ち上がり、ドアに向かう。
まもる「さとる」
さとる「何もするな」
まもる「何か知ってるの？」
さとる、何も言わずに部屋を出る。

○スナック・ハピネス 本社地下室　翌朝
中川がモニターを見ている。
そこへ ひろしが入ってくる。
中川「（振り返らずに）昨日の夜、電話してきたな」
ひろし「まもるが書斎に入りました」
中川「……見たのか」
ひろし「おそらく」
中川、椅子を回してひろしを見る。
中川「それで、たとえ家族であろうと内部情報を知られた以上、片付けることになるが」
ひろし「わかっています。鈴木さんにはすでに」
中川「早いな。もう話は通しているのか」
ひろし「はい」

中川「ではお前がやるか、俺のところの人間がやるか」
沈黙。
ひろし、中川から視線を外さない。
ひろし「私がやります」
中川、少し笑い、また椅子を回す。モニターへ。
ひろし「今週末、実行します」
ひろし、地下室を出る。
廊下。ひろし、壁に手をつく。

○とある公園　夕方
ひろしがベンチに座っている。
ポケットからメモ帳を出す。
七年分の数字が書いてある。
口座番号。金額。日付。
全部、ひろしが暗記している。
ひろし、それを見つめる。
公園の子供が笑っている。
ひろし、子供を見る。
また紙を見る。
折って、内ポケットへ。
スマホを出す。
連絡先を探す。「さとる」。
電話しかけるが止める。
ひろし、そのまま立ち上がり歩き出す。

○高橋家・台所　夜
３人で夕食を食べている。
まもる「お父さん、今日早かったね」
ひろし「用事が済んだからな」

静かな空間が流れる。
さとる「（味噌汁に向かったまま）うまい」
ひろし「そうか」
まもるが二人を交互に見る。
まもる「明日のライブ、昼に集まろうって友達が」
ひろし「そうか」
まもる「本番は夜だから、ご飯はいらないよ」
ひろし「わかった」
さとる、箸を置く。
さとる「ごちそうさま」
さとる、食器を片付け、自分の部屋へ行く。

○同・まもるの部屋　夜
まもるが夕食を終え、一人で部屋にいる。
すると部屋の外からノック。
さとる「俺だ」
さとる、扉を開け、鍵を閉めて部屋に入る。
まもる「どうしたの」
さとる「今週末のライブ、俺が行く」
まもる「え？」
さとる「お前のチケットで行く。友達には予定が入って行けなくなったって伝えてくれ」
まもる「なんで」
さとる「父さんが何故危ない仕事をしているのか、わかるかもしれない」
まもる「でも、危ないよ」
さとる「会場は暗いし人も多い。何度か行ったことがあるから、いざとなったら身を隠せる」
まもる、不安な表情を浮かべる。
さとる「大丈夫だ、俺を信じろ」

さとる、真っ直ぐな目でまもるを見る。
まもる「……わかった。なんかあったらすぐ連絡してよ」
さとる「ああ、もちろんだ」
さとる、まもるに背を向け、決意を固めた表情し部屋を出る。

○同・さとるの部屋　深夜
さとる、PCとスマホでSNSを調べながら机にノートに何かを書き続けている。

○高橋家玄関　ライブ当日・夕方
ひろしは仕事のため、不在。
さとるがまもるの前に立っている。
まもる「（チケットを差し出しながら）ちゃんと帰れよ」
さとる「当たり前だ」
まもる「何かあったら電話しろよな」
さとる「大丈夫だ。わかってる」
まもる「さとる」
さとる、立ち止まる。振り返る。
まもる「いってらっしゃい」
さとる、何も言わずでていく。

○ライブハウス「メガロピア」・ロビー　夜
さとる、入場する。
チケットを差し出す。
スタッフが「まもる」の名前を確認する。
スタンプが手首に押される。今日の日付。
さとる、フロアに入る前に、立ち止まる。
スマホを出し、誰かに電話をかける。
スマホをしまい、フロアに入る。

○ライブハウス「メガロピア」・会場内　夜

照明が落ち、音楽が始まる。

それと同時にさとるの背後に人影が近づく。

さとる、振り返る。

木村賢二（２０）が現れる。

木村の手に包丁。手が震えている。

さとる、木村の目を見る。目が合う。

包丁が、さとるの脇腹を貫く。

さとる、崩れ落ちる。

スマホが落ちる。

着信「まもる」。

さとるの手が画面に触れる。届かない。

木村、逃げる。

群衆はまだ気づいていない。

さとる、床に倒れたまま

さとる「……まだ、早い」

目が閉じた。

計画は、未完成のまま倒れた。

○タイトル「影が変わるとき」

○ビジネスホテル・室内　ライブ当日深夜

薄暗い部屋。テレビがついている。音量はゼロ。

コートを着たまま、ひろしが壁にもたれ床に座っている。

スマホが何度も震えている。画面を、見ない。

テレビのテロップが流れる。

「ライブハウス刺傷事件　死者一名　被害者は高橋さとる（２２）」

ひろし、テレビを見る。

音がない。テレビの光だけが部屋を照らしている。
ひろし、立とうとして、立てない。壁に手をついたまま崩れる。
机の上に、財布から出した写真。まもるとさとる、三歳。
同じ顔で笑っている。
写真を握る。
破こうとするが、できない。
ひろし、よれているスーツに手を通す。
そして、スマホを拾い、部屋を出る。

○公園　ライブ当日深夜
公園の水道で木村賢二が手を洗っている。
なかなか水を止めない。ひたすら手を洗う。
ようやく手を止め水を出しっぱなしのまま、スマホを出す。
母に電話しようとするが止める。
フードを目深に被り、闇へと消えていく。

○スナック・ハピネス本社　翌朝
デスクでスタッフが仕事をしている。
そこへ社長の鈴木正治（５５）が出勤する。
スタッフ「おはようございます」
鈴木「おはよう」
いつもと変わらない、穏やかな表情。
鈴木、社長室に入る。

○同・社長室
扉が閉まり、ブラインドを閉じる。
椅子に座る。
中川に電話をするが出ない。
PCの画面にネットニュース。

「ライブハウスで大学生が刺され死亡　被害者は高橋さとる（２２）」
被害者の名前が頭の中で回っている。
鈴木、真顔の表情のまま上着を脱ぎ、ストレッチを始める。

○警視庁捜査一課・会議室　同時刻
樋口、椅子に座ってファイルを見ている。
今朝、新しいファイルが一つ増えた「大学生　高橋さとる　殺人事件」
ノックの音。
樋口「はい」
山口と石動冴（３４）が入ってくる。
山口「樋口、ちょっといいか。今日から共に捜査に参加していただく、組織犯罪対策部の石動さんだ」
石動「捜査一課の樋口さんですね。組織犯罪対策部の石動です」
樋口「……なぜ組対が？」
石動「今回の事件、匿名流動型犯罪グループ、トクリュウとの関連性が極めて高い。現在マークしてるスナック・ハピネスはフロント企業に過ぎません。特殊詐欺・高齢者名簿売買・闇バイト募集、その背後に実態を隠した犯罪組織が七年前から活動している。我々もずっとマークしていた」
樋口「しかし今回の事件は刺傷死亡です。組対が出てくる話では」
石動「だから合同でやる。あなたは今回の刺傷事件を表から。私は組織の裏を。お互い、見えていないものを補い合う」
樋口、石動を見る。
樋口「……わかりました。よろしくお願いします」
石動「では早速、捜査資料を見せていただきますか」
樋口「こちらです」
石動、ファイルを開く。被害者のデータ。勤務先の欄を見る。
空欄。学生。父親の欄：「スナック・ハピネス　エリアマネージャー」。
石動、一瞬だけ止まる。
石動「被害者の家族は」

樋口「父親と弟。父親は昨夜から連絡が取れない状況です」
石動「それで？」
樋口「弟が今、病院に来ています」
石動「ではその面談、私も同席する」

○警察病院・廊下　同日
まもるが廊下に座っている。
目が赤い。しかし泣いていない。涙はすでに尽きていた。
樋口と石動が来る。
樋口「捜査一課の樋口といいます。いくつかお聞かせていただけますか」
まもる「……はい」
石動、まもるの横に座る。
石動「組織犯罪対策部の石動です。昨夜、お兄さんがライブに行った理由、知っていますか」
まもる、石動を見る。
何も言わない。
石動「お兄さんのチケットじゃなかったですよね」
まもる「俺の、です」
石動「なぜお兄さんが代わりに？」
まもる、また黙る。
樋口が口を開こうとする。石動が目で制す。
まもる「（絞り出すように）俺が行くと、何か起こるって知ってたから。さとるが、知ってたから」
石動、樋口を見る。
石動「お父さんは今、どこにいますか」
まもる「……わかりません」
石動、立ち上がる。
名刺を一枚、まもるの手に置く。
石動「お父さんから連絡があったら、教えてください」

石動、廊下を歩く。
樋口、まもるに一礼。
石動を追う。
樋口「（小声で）父親が怪しいと思ってるんですか」
石動「私は何も思っていない。ただ、知りたいことがある」
樋口「何を？」
石動「お兄さんが「知っていた」ならどこで知ったか」

○高橋家・さとるの部屋　深夜
まもるが廊下に立っている。
さとるの部屋のドアの前。
「入るな」と扉に張り紙がある。
まもる、ドアを開ける。
部屋は片付いている。
机の上に参考書。本棚に背表紙が並ぶ。
まもる、参考書の下に隠れているノートを手に取る。
「ＴＨ」「ＳＫ」「中川」。矢印。日付。「木村　１０月２３日」
まもる、手が止まる。
怪訝な表情。
ページをめくる。
最後のページには石動の名前と電話番号。
石動の名刺と見比べる。番号が同じ。
まもる「さとる……なんで」

○警視庁・捜査一課　事件から三日後
スーツ姿の高橋ひろしが来た。
しかしよれている。目の下に隈。
樋口が出てくる。
ひろし、深く頭を下げる。

ひろし「三日間、逃げていました。申し訳ありません」
樋口「中に入ってください」

○同・会議室

ひろし、椅子に座っている。
向かいに樋口。横に石動。
ひろし、石動を見る。
石動、ひろしを見る。
樋口、この二人の視線に気づいていない。
ひろし「（樋口に向かって）息子が殺された理由、知っています。私が関わっていた組織がさとるを」
樋口、身を乗り出す。
石動は動かない。
ひろし「スナック・ハピネス。七年間、私はその会社の裏の業務に携わっていました。顧客データの管理。資金の流れの管理。そのデータをまもるが見た。それで」
樋口「まもる君がターゲットに」
ひろし「さとるは、代わりに行ったんです。まもるの代わりに」
樋口、息を飲む。
石動は、今ひろしの手を見ていた。
手が震えていない。
ひろし「私も協力したい。中から情報を出せます。引き換えにまもるを守ってほしい」
石動「スナック・ハピネスに関する内部資料、今持っていますか」
ひろし「一部、手元にあります」
石動「全部は？」
ひろし「七年分のログは、会社のサーバーに」
石動「アクセス権限は？」
ひろし「あります。今も」

樋口「高橋さん。一つ聞いていいですか」
ひろし「はい」
樋口「事件から今日までの三日間、どこで何をしていましたか」
ひろし「迷っていました」
石動は、また手を見ていた。

○ファミレス　同日夜
ひろしが一人でいる。
向かいに中川が来る。
指に包帯、顔にも僅かに、あざがあった。おそらく鈴木にやられたものだとひろしは察した。
中川「（静かに）警察に行ったな」
ひろし「はい、行きました」
中川「何を言った」
ひろし「さとるが私の息子で、組織に殺されたと。捜査に協力したいと言いました」
中川「それは鈴木さんへの裏切りだ」
ひろし「鈴木さんは知っています」
中川、表情が変わる。
ひろし「私が警察に入ることを鈴木さんに相談しました。捜査の動きを内側から監視する。それが鈴木さんの指示です」
中川、ひろしを見る。
ひろしの目は揺れていない。
中川「確認する」
ひろし「どうぞ」
中川、スマホを取り出してから一度ひろしを見る。
電話をかける。低い声で何かを言うが聞こえない。
電話を切る。
中川「（表情が少し変わって）本当だった」

ひろし「はい」
中川「まもるの件は、まだ生きている。わかるな」
ひろし「わかっています」
中川、立ち上がる。
コーヒーの代金をテーブルに置く。
ひろしの分も。

○警視庁・廊下　翌朝
石動が一人で廊下を歩いている。
ひろしとすれ違う。
誰もいない廊下。
石動「（足を止めて）昨夜、どこに行きましたか」
ひろし、石動を見る。
ひろし「食事に」
石動「一人で？」
ひろし「はい」
石動、ひろしを見たまま
石動「高橋さん。私は七年前から、スナック・ハピネスを追っていた。
そのとき内部の管理担当者のリストに、あなたの名前があった」
ひろし、動じない。
ひろし「今でも、組織と繋がっています。これは樋口さんには言っていない」
石動「（表情を変えず）知っていました。昨夜、あなたが中川と会った写真がある」
ひろし、目が動く。
石動はそれを見た。
石動「選択肢は二つ。今すぐ私に全部話す。またはこの場で逮捕される」
ひろし、目を閉じる。
ひろし「（目を開けて）三つ目の選択肢はないですか」
石動「どうぞ」

ひろし、内ポケットから紙を取り出す。
七年分の数字。口座番号。金額。日付。
石動は受け取らない。ただ見ている。
ひろし「中川と鈴木には別々の目的がある。中川は鈴木を利用しながら裏切っている。この数字が証明します。二十万のズレ。中川が横領している」
石動「（じっとひろしを見て）それを使って何をする気ですか」
ひろし「中川と鈴木を戦わせる。その隙に、まもるを安全な場所に移す。
それから全部警察に渡す」
石動、ひろしを見る
石動「一つ確認する。さとるさんはあなたの計画を知っていましたか」
ひろし、何も答えない。
石動「乗った。ただし、私の指示通りに動く。樋口には言わない」

○警視庁・会議室　翌週
三人が地図を広げている。
ひろし、樋口、石動。
石動はひろしを「証人」として扱う。
樋口はひろしを「被害者の父」として扱う。
ひろしはその両方を演じている。
ひろし「（地図の一点を指して）地下の倉庫に、中川のチームが使う作業場があります。ここに一週間に一度、集まります」
樋口「何曜日？」
ひろし「木曜。夜十時から」
樋口、メモを取る。
石動はひろしの目を見ている。
ひろしは地図を見たまま。
石動「その場所に、サーバーはありますか」
ひろし「サーバーは地下倉庫の奥に部屋があります」

石動「本社にアクセスできる日は」
ひろし「私のIDカードが有効な間は、いつでも」
石動「まだ有効ですか」
ひろし「昨日、確認しました。有効です」
樋口が石動を見る。
小さく頷く、石動。
樋口、嬉しそうに。
樋口「高橋さん、本当に助かります」
ひろし「……さとるの代わりに、できることをしたいだけです」
樋口、目が少し赤くなる。
石動、それを見ている。
表情は変わらない。
ただ、次の動きを考えている。

○高橋家　夜
まもるが一人でご飯を食べていると、ドアのインターホンが鳴る。
まもる、立ちあがって。
まもる「はい」
石動「（インターホン越し）石動です」
まもる、少し固まる。
ドアを開ける。
石動、一人でいる。
石動「少し話せますか」
まもる「どうぞ」
石動、部屋に入る。
テーブルに弁当箱が二つあるのを見る。
椅子に座る。
石動「お兄さんが会場で誰かに通話した履歴が残っていますがご存じですか」
まもる「通話？」

石動「ええ、非通知で」
まもる、固まる。
二人がつながっていることは知っているが、ここでは話さない。
まもる「それは……どういう意味で」
石動「おそらくあなたのお兄さんは、自分が来ることを組織に知らせていた」
まもる「なぜそんなことを」
石動「あなたも、わかりませんか」
まもる「……さとるは何か計画してたんですか」
石動「もし、あなたのお兄さんが計画の全部を知っていたとして。それ
でも間に合わなかった。そこが空白なんです」
石動、立ち上がる。
出ようとして、さとるの弁当箱の前で止まる。
石動「何か思い出したら私に直接。樋口じゃなく、私に」

○スナック・ハピネス 本社近く　木曜夜十時
捜査車両が三台、停まっている。
樋口が無線を持っている。
石動が隣。
ひろしが後部座席。
すると本社に数人入っていく。
樋口「（無線で）中川のチームが集合したことを確認。突入を」
石動「待て」
樋口、止まる。
石動、ひろしを見る。
石動「人数は？」
ひろし「今夜は七人のはずです」
石動「中川は？」
ひろし「います。確認しました、三十分前」
石動、樋口を見る。

石動「行け」
樋口、無線で指示を出す。
チームが動く。

○同・地下室　同時刻
突入。ドアが蹴られる。
樋口「動くな！」
四人が取り押さえられる。
残り三人は逃げようとするが捕まる。
だが中川はいない。
樋口、部下に確認する。
樋口「中川は？」
部下「どこにもいません」
樋口、奥の部屋を見渡す。
サーバーは空。
棚にあるべきものがない。
樋口「（外に出て、悔しそうに）逃げられた。事前に察知されていた」
石動、車の横に立っている。
ひろしを見ている。
ひろし、石動を見ている。
樋口が来る。
樋口「情報が漏れていたかもしれません。経路を絞り込む必要が」
石動「それで？」
樋口（ひろしを見てから、石動に）……まだ、内部に漏えい経路が」
ひろし、目を逸らさない。
石動も、目を逸らさない。
石動「（樋口に）それについては、私が調べる。今夜はここまで。引き上げろ」
樋口、納得していない顔で引き上げる。

石動とひろし、二人残る。
石動・ひろし「（二人同時に）予定通り」
石動「中川への連絡に使ったルートを変えろ。次は本物の踏み込みをする」
ひろし「まもるは」
石動「今夜は動かない。明日、移動させる」
ひろし、頷く。
石動、車に乗る。
今夜の「失敗」は計算通りだった。
でも中川は予想より、速い。

○高橋家　翌朝・金曜日
まもるが台所で湯を沸かしている。
さとるの弁当箱が台所の隅に置いてある。
洗ってある。中身は空だ。
でも、捨てられない。
インターホンが鳴る。
まもる「はい」
返事がない。外で誰かが通話している声が微かに聞こえる。
まもる「…どなたですか」
鍵が回る音。ドアが開く。まもるが振り返る。
廊下に黒ずくめの男が二人。
顔は見えない。
まもる「（後退りながら）誰だ」
男Ａが近づく。
まもる、近くにあった鍋を持つ。
振り上げようとした、その瞬間、男Ｂが後ろから腕を掴んだ。
まもる、叫ぼうとするが、首にスタンガンが流れる。
まもるの目が台所の隅へ行く。
さとるの弁当箱。

引きずられながら、目だけがそこにある。
ドアが閉まる。
弁当箱だけが、台所に残された。

○スナック・ハピネス本社・一階ロビー　同時刻
ひろしが通勤のために建物に入る。
エレベーターに乗る。
スマホを出す。
まもるに電話するが繋がらない。
エレベーターが三階で止まる。
ドアが開くと中川が立っていた。
中川「（穏やかに）おはようございます、高橋さん。少し話しましょうか」
ひろし、中川を見る。
エレベーターを出る。
人目につかない場所まで移動する。
中川「昨日は危なかったですよ。ああいうのはもっと事前に言ってください」
ひろし「すみません……緊急性が高かったもので」
中川「頼みますよ。で、これを見てもらいたくて」
中川、スマホを取り出す。
ビデオ通話画面。そこには捕らわれたまもるの姿があった。
ひろし、怒りを抑えて
ひろし「まもるを連れて行ったのか」
中川「保護しています」
ひろし「それは保護とは言わない」
中川「高橋さん。今夜、最後の仕事をしてもらいます」
ひろし、中川の顔を見る。
中川「警察に、うちのアジトの「場所」を教えてください。鹿浜二丁目の倉庫
です」
ひろし「……そこには何がある」

中川「何もない。でも捜査が来れば、警察は動いたという実績ができる。石動さんも満足するでしょう。そのあいだに本物は別の場所で片付く」
ひろし「本物の場所は」
中川「臨海町の倉庫です。あそこには鈴木さんの大切なものが保管されている。七年分の裏資金、貴金属。当日は鈴木さんも確認に来ます。まあ、わざわざそんなところで片付ける鈴木さんも趣味が悪いですよね」
ひろし「（平静を保って）……わかりました」

○警視庁・石動の執務室　同朝
石動が一人で地図を広げている。
赤いペンで丸をつけた場所が三つ。
高野台。鹿浜。臨海町。
石動、鹿浜の丸を見る。
ペンのキャップをはめる。
スマホが鳴る。
石動、出る。
石動「石動」
電話口から低い声が聞こえる。
石動「わかった。臨海町を使う」
電話が切れる。
石動、地図の鹿浜の丸を消す。
臨海町の丸を、もう一回りさせる。
上着を着て部屋を出る。

○警視庁・廊下　同日午後
ひろしから樋口に連絡が入った。
「鹿浜二丁目。今夜十時」
樋口は即座に石動を探す。
しかし石動は部屋にいない。

電話をしても繋がらない。
山口が通りかかる。
山口「石動さんなら朝から外出だ。今日は来てないぞ」
樋口「朝から……」
まもるが誘拐されたのも朝。
石動が外に出たのも朝。
その二つが、樋口の頭の中で並んだ。
「鹿浜二丁目。今夜十時」
それだけを持って、樋口は動く。
樋口「ありがとうございます」

○鹿浜二丁目・倉庫　同夜
樋口が機動隊員三人と突入した。ドアを蹴る。
中に突入するが、誰もいない。
樋口「また……もぬけの殻だ」
スマホが鳴る。ひろしから電話。
樋口「（怒って）高橋さん。ここは」
ひろし「（電話）樋口さん。今すぐ出てください！その場所は囮です！
まもるは別の場所にいる！」
樋口「別の場所って、どこですか！」
電話が切れた。
樋口、もう一度かけるが繋がらない。
樋口、倉庫の出口へ走る。

○江東区・路上　同夜
ひろしのスマホが鳴る。中川から電話。
ひろし「はい」
中川「（電話）警察が鹿浜に二丁目に入ったことが確認できた。あとはこちらでやる」

電話が切れる。
スマホを持ったまま、歩き出す。
ひろし、ポケットから折りたたんだ紙を出す。

○石動のスマホ　同夜
スマホに着信。
石動、画面を見てから出る。
石動「石動」
電話口「臨海町。今から三十分で動かします」
石動、地図を見る。
石動「わかった」
電話を切る。
すぐに別の番号をかける。
石動「樋口か」
樋口（電話）石動さん！どこにいますか！まもるくんが！」
石動「臨海町へ すぐ来い。住所は後ほど送る。応援も呼ぶな。二人で行く」
樋口「（電話）なぜ応援を」
石動「説明は後だ。来い」
電話を切る。

○臨海町・倉庫　夜
蛍光灯が一本、寂しそうに光っている。
まもるが、鉄管に手首をテープで固定されている。
椅子に座っている。
木村賢二が、壁にもたれて立っている。
スマホを見ている。
まもる「（木村に向かって）寒いな」
木村、何も言わない。
スマホを下ろす。

まもる「お前、名前は」
木村「（睨んで）黙れ」
まもる「俺はまもる。高橋まもる。高橋さとるの弟」
　木村の身体が動いた。
まもる「お前がライブ会場にいたやつか」
　木村、目を逸らす。
まもる「（冷静に）顔が似てるから間違えたんだろ。俺とさとるは一卵性だから。写真じゃわからない」
木村「（小さく）……うるさい」
まもる「うるさくないよ。俺は怒鳴ってない」
　木村、まもるを見る。
　縛られたまま、まもるはまっすぐ前を向いている。
　木村、まもるの眼差しに圧倒され、思わず背を向ける。
木村「……何で怒らないんだ」
まもる「お前に怒ったって、さとるは戻らない」
　木村、止まった。
まもる「お前はいくつだ」
木村「……関係ないだろ」
まもる「俺と同じくらいだろ。なんでこんな仕事してるんだ」
木村「（苦しそうに）うるせえんだよ！」
　木村の声が倉庫内に響き渡る。
まもる「借金か」
　木村、沈黙する。
まもる「バイトの募集に引っかかったのか。日当五万とか簡単な作業とか。俺の友達でも何人か釣られそうになったやつがいたよ」
木村「お前の友達の話なんかどうでもいい」
まもる「でも、お前にも友達いたんじゃないか。こんな仕事する前の話に」
　木村、答えない。
まもる「お前も、使い捨てにされてるんだろ。俺を消したあとで、次はお前が

消される。そういう仕組みだろ、こういうの」
木村、再びまもるに近づく。
中腰になり、目線を合わせた。
まもるのまっすぐな視線に、木村の目が震えていた。
木村「……わかってる。でも今更、どうしようもないだろ。逃げたら俺の家族が」
まもる「家族がいるのか」
木村「母親が一人……病気で。入院費が」
まもる「お前の母親は、お前に人を殺してほしいと思ってるか」
木村、答えれない。
まもる「俺のテープを外してくれ。それだけでいい。あとは俺が何とかする」
木村、まもるをじっと見る。
木村「……信じていいのか」
まもる「ああ、もちろんだ」
そして木村の手が、まもるの手首のテープを剥がしていく。

○臨海町・倉庫近く・路上　同夜
ひろし、タクシーを見つけ、乗り込む。
ひろし「臨海町の倉庫へ お願いします」
運転手「あそこは閉まってて中まで入れないですよ」
ひろし「なら手前で停めてください」
タクシーが走る。
ポケットのメモ帳を取り出す。
七年分の数字。
これを使う場所と使う人間は、決まった。

○臨海町・倉庫近く　同夜・同時刻
石動と樋口が車を降りた。
石動が倉庫の配置図を持っている。

樋口、それを見て。
樋口「これ、いつから持ってたんですか」
石動「（地図を折りながら）三日前から」
樋口「三日前って、まもる君が誘拐される前じゃないですか」
石動「そうだ」
樋口、石動を見る。
樋口「石動さん、あなたは最初から」
石動「（遮って）後でいい。今は行け」
樋口「後でじゃなくて今聞きます。あなたは、まもる君が誘拐されることを知っていましたか」
石動、樋口の目を見る。
石動「知っていた」
樋口「まもる君を囮に使ったんですか」
石動「使われる前に使った」
樋口「同じことですよ」
石動「違う」
樋口「どこが」
石動「（冷静に）中川はまもる君を「今夜片付ける」と決めていた。中川の網はあなたが思うより広い。だから私はあえて中川に囮の居場所を教えた」
樋口「どういうことですか」
石動「この臨海町の倉庫で片付けようとしていることは誘拐される前からわかっていた。ここはスナック・ハピネスのアジトだ。助けを呼べない上に証拠が残らない。それにここには、七年分の裏資金や貴金属が眠ってる。それを確認しに二人は必ずやってくる。」
樋口「（声が震えて）じゃあもし、あなたの計算が一つでも狂っていたら」
石動「だから木村を使った」
樋口、表情が変わる。
石動「木村賢二を三週間前からSにした。彼に「まもる君と二人きりになれ」

と指示した。まもる君が動けるよう、テープを外させる。そういう手順を踏んでいる」
樋口、全てが繋がる。
樋口「俺には、何も教えてくれなかった」
石動「あなたの「信じる目」が必要だったから。高橋ひろしへの。
あなたが疑いを持てば、ひろしと中川は感づく。全部崩れてしまう」
樋口、石動を見る。
樋口「（覚悟を決めて）行きましょう」
二人、走り出す。

○臨海町・倉庫・内部
まもるのテープが外れた。
まもるが立ち上がり、木村と向かい合う。
木村「出口はあっちだ。俺が見張りを引きつける。三分待ってから走れ」
まもる「お前は」
木村「俺は、自首する。（少し笑って）逃げる先が、ないんだよ。俺には」
まもる、木村を見る。
まもる「一緒に来い」
木村「は？」
まもる「俺の知り合いの刑事に直接渡す。自首するなら一人でするより、その方がいい」
木村「そうか、ありがとう」
木村、ついて行く。

○臨海町・倉庫・外　同刻
ひろしが倉庫の外壁沿いを走っている。
角を曲がると黒い車が二台、停まっている。
中川の車だ。ひろしは知っている。
中川が来た。

乗っているのは、中川一人ではない。
後部座席から鈴木が降りてくる。
石動の言った通りだ。
だが彼女が来る前に、二人が倉庫に入れば、まもるが危ない。
ひろし、メモ帳を出す。
七年分の数字。
これを今使う。
ひろし、鈴木の前に出た。
鈴木と中川、止まる。
ひろし「（鈴木に向かって）鈴木さん。七年間お世話になりました」
鈴木「（穏やかに）おや高橋くん。こんな場所で」
ひろし「これを見てもらえますか」
ひろし、メモ帳を差し出す。
七年分の数字。
鈴木、受け取ろうとする。
ひろしは中川に向けた。
ひろし「（中川に向け）こちらには中川さんが横領した額が載っています。
月ごとに。二十万から始まって七年で合計いくらになるか。
計算は、鈴木さんの方が早いでしょう」
中川の顔が変わった。
同時に鈴木の顔も変わった。
中川「（声が上がる）高橋、お前！」
鈴木「（穏やかな顔が崩れて）中川。説明しろ」
中川「これは、こいつが作った偽の数字です。捏造です。信じないでください」
鈴木「では、確認しよう。今すぐ」
中川と鈴木が睨み合う。
その間、ひろしは半歩退く。

○臨海町・倉庫・裏口前　同刻

石動と樋口が裏口に着いた。

扉が、開いている。

中からまもると木村が出てきた。

樋口が走り、まもるの前に立つ。

樋口「まもる君、無事ですか！」

まもる「はい」

樋口（木村を見て）この人は」

まもる「俺を助けてくれた。自首したいと言ってます」

樋口、木村を見る。

木村、目を逸らさない。

二人、手を上げる。

石動、無傷であることを確認する。

石動「よかった」

石動、少し微笑んだ。

○臨海町・倉庫・外　夜

ひろし、中川、鈴木が路上で対峙している。

その場に石動が一人で現れる。

石動「（三人を見て）鈴木正治さん。中川浩さん。高橋ひろしさん。お揃いで」

鈴木、石動を見る。

笑顔が戻ろうとしている。でも戻り切れない。

鈴木「石動さん。これは誤解があって」

石動「（遮って）説明は後でゆっくり聞きます。今夜はその前に、一つ見てもらいたいものがある」

石動、スマホを出す。

画面を鈴木に見せる。

鈴木、目を細める。

中川、横から見ようとする。石動が向きを変える。
石動「着信履歴。さとるさんが亡くなった夜に掛けられたものです」
そこには「非通知設定」からの着信履歴が残されていた。
中川、声を出す。
中川「それは俺のスマホへの着信じゃないか！実行前の」
石動「（中川に向けて）いいえ。この番号は私の番号です」
中川と鈴木、表情が変わる。
石動「さとるさんはライブ会場に入る前に私の番号に電話をかけてきた。そして、これがその時の音声です」
石動、ボイスレコーダーを取り出す。
さとる（声）「会場に着きました。計画通りです。中川の横領証拠は父が持っています。木村が動けば、残りは石動さんが動いてください。まもるのことをお願いします」
沈黙。
鈴木「中川。やはり私の金を」
中川「（動揺して）鈴木さん、これはあの大学生が。彼が」
鈴木「答えろ」
中川、逃げようとする。
石動が動く。一秒で距離を詰める。
中川の腕を捻り上げる。
石動「（冷静に）中川浩、殺人罪および組織的処罰法違反の疑いで逮捕します」
鈴木、舌打ち。後退る。
奥から、樋口が来る。
木村とまもるを連れて。
樋口「鈴木正治さん、詐欺罪および殺人罪の共謀共同正犯の疑いで逮捕します」
鈴木、諦めた様子で頷く。
樋口が手錠を出す。

○臨海町・倉庫　スナック・ハピネス　アジト
大量の裏資金、貴金属を警察が調べに入る。

○臨海町・倉庫・外
パトカーに鈴木と中川が入っていく。
石動、その様子を見ている。
すると、まもるが石動の横へやってくる。
まもる「石動さん、ありがとうございました」
石動「すまない、まもる君には辛い思いをさせてしまった」
まもる「……実は事件の翌日、さとるの部屋に入ったとき、組織の情報と石動さんの電話番号が書いてあるノートを見つけました」
石動、表情が変わる。
石動「じゃあ全てわかってて……」
まもる「暗号みたいで全然理解できなかったけど」
石動「では木村を説得したのは、まもる君の判断なのか？」
まもる「はい」
石動「でも彼はお兄さんを殺めた張本人だぞ」
まもる「……彼も追い詰められていた。それに、さとるは復讐なんて望んでない。何も残らないってわかってるから。それなら今困っている人に手を差し伸べたい」
石動、表情が固まる。
石動「（見直した様子で）本当、あなた達には頭が上らない」
まもる「（少し笑って）でも、さすがに誘拐されるとは思いませんでした。そこまでさとるは予想してなかったと思います」
石動「君は強い。この先の人生もきっと逆境を乗り越えられる」
まもる「ありがとうございます。最後に一つ、お願い聞いてもらえますか」
石動「なんだ」
まもる「父親とお話ししてもいいですか」

石動、黙って頷く。

○臨海町・倉庫・外　やや離れた場所

ひろしとまもるが、向かい合っている。

何も言えない様子の二人。

まもるが先に、口を開いた。

まもる「（声が少し震えて）お父さんは今ここにいる。来てくれた」

ひろし「まもる……」

まもる、ひろしに近づく。

ひろしは動けない。

まもるがひろしの胸に、頭を当てた。

抱きつくのではない。

子供のころのように。

夢で怖くて、台所に来たときのように。

ひろし、腕を上げる。

まもるの背中に、回した。

○警視庁・廊下　翌朝

樋口が廊下を歩いている。

石動が反対方向から来る。

樋口「（向かい合って）さとるさんから連絡があったのはいつですか」

石動「一ヶ月前から」

樋口「一ヶ月前……」

石動「彼は最初、情報をメールで送ってきた。「スナック・ハピネスの内部構造」を。組対のマークリストに載っていた企業だったから私が直接、連絡を取った」

樋口「さとるさんは初めから、石動さんを選んだんですか」

石動「なぜ私を選んだかは聞いていない。でも、一つだけ言った」

樋口「何を」

石動、少し間を置く。
石動「まもるに、怖い思いをさせないでほしい。それだけ言った」
樋口、目が赤くなる。
抑えようとするが抑え切れない。
石動はそれを見ていたが何も言わない。
樋口「俺の……信じた目を使ったことは、今でも怒っています」
石動「そうか」
樋口「でも間違ってなかったとも、思っています」
石動「……それで？」
樋口「（少し笑って）次の捜査、一緒にやりましょう」
石動「決まってる」
二人、また歩き出す。
別の方向へ。

○高橋家　朝
まもるが台所に立っている。
コンロに鍋。湯を沸かしている。
台所の隅には、さとるの弁当箱。
まもる、それを見る。
手を伸ばす。
蓋を開ける。
中は空。
まもる、弁当箱を台所の隅からテーブルへ移す。
窓の日が当たる場所へ。
そこに置いた。
湯が沸く。
まもる、インスタントの味噌汁を作る。
座って食べる。
さとるの弁当箱が日の中で光っている。

まもる、それを見ながら食べる。

○留置所・面会室　翌週

アクリルガラスを挟んで、まもるとひろし。

ひろしが面会服を着ている。

二人、最初は何も言わない。

まもるが先に口を開く。

まもる「石動さんから聞いた。さとるが一ヶ月前から動いてたって」

ひろし「知らなかった」

まもる「そうだよね」

ひろし「さとるは教えなかった。俺と石動さんを別々に動かした」

まもる「（少し笑って）あいつ、全部計算してたんだな。でも一個、計算が外れた」

ひろし「中川が、想定より早く動いた」

まもる「そう。木村を早く動かした。だからさとるの「逃げ出す」タイミングがなかった」

二人、沈黙。

ひろし「（絞り出すように）私が七年早くやめていれば」

まもる「（静かに）過去は変わらない。さとるが好きそうな言い方で言えば、終わった事象を悔いることは非合理的だ」

ひろし、唇が震える。

同時に涙が溢れる。

まもる「（ガラスに手を当てて）お父さん。俺は待ってるから。出てきたら一緒にさとるのとこ、行こう」

ひろし、ガラスに手を当てる。

まもるの手と、ガラス越しに重なる。

声が、出なかった。

声にならない返事が目の中にあった。

○墓地　朝　最初のシーンに戻る

事件から五年後。

快晴。

光の中に「高橋さとる」の墓石。

まもる（２７）が一人で来た。

手にはみかんが一つ。

供える。

すでにみかんが一つ、置いてある。

今日は出所の日だ。

真っ先にここへ来たのだろう。

まもる、手を合わせる。

目を閉じる。

目を開けると、二つのみかん。

まもるの手が、墓石に触れる。

まもる「さとるのこと何一つ無駄にしてないよ。俺が保証する。俺が覚えてる」

風が吹く。

みかんが少し転がった。

みかんを拾う時、少し離れた先にひろしと木村が立っているのが視界に入る。

ひろしと木村、まもるを見ている。

まもる、手を上げた。

ひろしと木村（２５）、歩き出す。

まもるのところへ。

墓石のところへ。

さとるのところへ。

三人が、並んで立つ。

墓石を挟んで四人分の空間が流れている。

了